

る。

終わりに、シベリアの凍土に眠る戦友の御冥福を祈念して終わりとする。

【執筆者の紹介】

経歴

生年月日 大正七年一月二十四日

新潟県川治村立尋常高等小学校を卒業。少年時代、鉄道省信濃川発電工事事務所で給仕などをやり、青年時代は家事農業に従事。昭和十七年五月一日付をもって新潟県巡査を拜命し、新潟警察署に配置される。現職一年にして、同十八年十月五日会津若松東部二十四部隊に召集入隊し、同十月二十日満州第一三八七部隊に転属。同二十年八月八日四平街に移駐し、同十五日終戦により陽木林に集結。同九月二十七日満鉄に乘車し、同十月三十日黒龍江を渡り、ソ連領ブラゴエシチエンスクに入る。同年十一月十一日と記憶しているが、イルクーシツク第六收容所に入所。測量助手、製材工場、火力発電所、煉瓦工場、工場建設などの作業に

従事。昭和二十三年十月下旬頃チェレンホーボ炭坑に移送され、建築の基礎工事作業などを行う。翌二十四年五月下旬頃ハバロフスクに移送され、一般住宅の補修作業、水道管布設作業などを行う。同十一月下旬ナホトカに移送され、帰還船栄豊丸七千トンに乗船し、同十二月四日舞鶴港に上陸し、帰郷した。

昭和二十四年十二月二十日頃警察官に復職し、昭和五十年三月三十一日付をもって円満退職した。

(新潟県 山崎 菊司)

三年間のシベリア抑留記

石川 山本 利男

第二次世界大戦が終わって半世紀以上が経過した今日、日本は本当に平和で豊かな国になったと思う。喜寿を過ぎた私にはすべてが驚きと夢のまた夢である。静かに瞑想すれば、「欲しがりません！ 勝つまでは」と勤勉節約の少年時代↓「死生を貫くものは崇高なる

献身奉公の精神なり、生死を超越して一意任務の完遂に邁進すべし」として戦った青年期の四年間、戦いに敗れ屈辱の捕虜として強制労働に服した三年間——戦場では、傷つき倒れ苦しい、断末魔の下から東方の祖国日本を伏し拝んで「万歳三唱」して去って逝った戦友達——極限の極寒と飢餓線上をさまよったシベリア凍土の重労働等々。戦争とは何か？ 敗戦とは何か？ 捕虜とは何か？ そして平和とは何か？ 憎むべき戦争・敗戦・捕虜！ 万人が希求する平和、その平和を如何にして守るのか。こんなことに思いをはせながら、私の体験したシベリア抑留記を書き綴ることにはたい。

一、終戦前後の状況

昭和二十年三月六日、満州東部国境を警備していた我が部隊に出動命令が下り、中支那の上海西南百数十キロメートルにある杭州湾に移駐した。到着すると直ちに中支那派遣軍総司令官の「全將兵に告ぐ」というパンフレットを受け取った。内容は「諸君！ この静かな田園この建物そしてここに住む人々、気候風土等

一木一草に至るまで諸君の愛する懐かしい故郷の天地とあまりにも似通っているではないか。見給え、そこ行く人達を！ 君の両親であり妹ではないか。遣隋使・遣唐使をはじめ日本文化の源泉はここにある。日本と支那は一心同体なのである。軍規を厳正にして、いやしくも現地住民に対して不信の念を与えるような言動は絶対してはならない」というものであった。アメリカ軍はこの方面に上陸する可能性があるからと「蝟壺……タコツボ戦略」や奇襲戦法等、敵軍上陸に備えて連日猛特訓を重ねていた。かつて日本軍が上海事件、支那事変と再度にわたって敵前上陸したこの地で、今度は攻守とところを変えての戦闘準備であった。

昭和二十年六月十三日、再び部隊は満州西部国境へ移動。ヤルタ会谈（米英ソ中の首脳が会合）で、どうもソビエトの態度が怪しくなってきたという噂だった。二カ月後の八月九日、ソビエト軍は一方的に日ソ中立条約を破棄して満州に侵入してきた。ソ連戦闘機が飛来し、近くに敵落下傘部隊が降下したとの情報も入ってきた。私は、「いよいよ最後の時が来た、明治

以来祖父達が五十年間血と汗とで築き上げてきたこの土地だ、寸土たりとも敵手に渡してなるものか！ さあ前線へ！ 華と砕けんのみ」と張り切っていた。八月十一日、部隊に出動命令が下った。しかし意外にも前線ではなく奉天へ転進するというのである。現在の関東軍の兵力では全戦線にわたってソ連軍と戦うことは無理である。従って戦線を奉天付近にまで縮小してそこで決戦をするのだと言う。私達は断腸の思いで先祖に心からの陳謝を捧げてこの地を後にした。

八月十五日午後二時奉天駅に到着。線路わきの満鉄官舎前に、奥さんたち数人が集まって目をはらして泣いている。先ほど天皇陛下下の「終戦に関する玉音放送」があったと言う。全身からは全精力が抜けて蟬殻のようになった。うだるような暑さであった。これから一月間の詳細を語ることは、思い出すことすら「毛が逆立つ思い」である。ソ連軍の数々の蛮行——強姦、略奪を眼前にしてもどうすることもできない敗軍の悲哀と、切齒扼腕を語ることはご容赦願いたい。

二、奥シベリアへ

八月二十三日ソ連軍が奉天市内に進駐した後、市郊外に浪々の逃避行を続けていた九月十四日、私達に朗報が飛び込んできた。「日本に帰るから直ちに奉天駅に集合すべし」と。一度死に損じた命は惜しくなるもの、溺れる者は藁をも攬む。ソ連警備兵の言葉に疑問を抱きつつも十月四日、黒河から黒龍江を渡ってソ連領ブラゴエンチェンスクに入った。

これからの三十日間は、ゴトゴト、ガチャーンと、一車両で馬二頭を運搬する貨車にすし詰めにされ、バイカル湖を過ぎノボシビルスクを経て十一月二日早朝、アフガニスタン北方にあるソ連邦カザフスタン共和国カラガンダ市郊外の、チメルタウ捕虜収容所に収監された。カラガンダはソ連屈指の石炭の産地で、日本との時差は四時間である。

ソ連労働者の話では、チメルタウ市は、十年余り前の一九三二年ウクライナから囚人としてここへ来たときは、砂漠の中に目じるしの杭が一本立っていただけだったと言う。ここに人工湖を造り、街路樹を植え、

道路や河を造るのである。私達が到着したときは、既に人工湖は完成し大きな鉄工所とカーバイド工場が各一あって、人口は約二万人であった。街道りはこれからという状況で、私達日本人捕虜千人はこれからこの町の建設要員として投入されることになったのである。ここは一年の半分は冬で、十月下旬から翌年の四月下旬までは湖が完全に凍結して湖上をトラックが走行する。大陸性気候で、冬は風が強く体感温度はカ氏零下五十度を超すことも稀ではない。捕虜は野外の土木作業が主体で、私達は防寒具に目玉だけ出しての重作業だったが、まつげが凍って雪ダルマのようになっていた。仕事に手加減を加えれば凍傷である。いくら満州が寒いと言ってもシベリアのことを思えば春である。夏はまた逆にカ氏百度以上になる。そして極端に夏の日は長く冬は短い。即ち夏の日長は午後十時過ぎに暮れて朝三時頃には日が昇る。冬は午前十時近くでも薄暗く午後四時頃には日が暮れるので、私達は野外照明灯の下で仕事をした。

三、強制労働

私達は明治の三國干渉（露・独・仏の三國が日清戦争勝利で獲得した日本の権益を放棄させ、逆にロシアがこれを奪取した）を想定していたので、「十年後には子孫達は必ずヤソ連と一戦を交えることになるであろう。絶対に仕事などしないぞ。殺せ！ 敵国を富ますようなことなどするもんか」という心構えだった。しかしソ連人はなかなか巧妙である。仕事にノルマがあつて、その日の労働成果によつて夕食のパンの大きさが違うのである。「働かざる者は食うべからず」。隣りの者は四百グラムのパンを食つていても、自分は二百五十グラムの小さいパンで我慢しなければならぬ。

日本軍は収容所に入つてからも、初めの一年間くらいは階級章をつけ旧軍隊の組織や命令系統はそのまま維持していた（満州からブラゴエのソ連領内に移動するときには、将校は長い軍刀を掲げ中隊長は乗馬で入ソした）。ソ連は旧軍隊の組織をそのまま認め、そしてこれを労働力活用にうまく利用した。将校は別棟で

生活し肉体労働から解放される。ただし兵士を指揮監督して作業能率を高めなければならない。

作業班は二十五人で一小隊を編成して将校一人が長となり、四個小隊をもって一個中隊とした。収容所内は、平屋木造建て教棟に分かれている。棟内は入口の異なる二、三の大広間に鉄製の二段ベッドがぎっしりと並べられ、その上段か下段のどちらか一つ「幅一メートル、長さ二メートルの藁布団の上」、こここそが唯一つ捕虜の自由な天国、わが家であった。そして大抵一個中隊が同一の広間に入った。前述のごとく将校は別棟で、ここには兵士のみが収容された。

収容所での日課は、六時起床、そして朝食、七時営庭に集合、点呼の後作業班ごとに営門を出る。ここで銃剣を持ったソ連警備兵が一班ごとに二人ずつ、先頭と後尾に各一人ずつ付く。作業場までは日にもよるが徒歩で約一時間である。作業場に到着すると現場主任の指揮下に入り、原則として午前八時〜午後五時まで（昼食休憩は一時間）の労働である。午後五時になると現場主任が一日の作業量を測定し、その成果測定表

を警備兵に渡す。この通知表によって夕食のパンの量が決定される。収容所には六時過ぎ帰り七時夕食、十時就寝である。これを月々土曜まで繰り返し日曜は休日で、一週間の拘束労働時間は五十四時間であった。もちろんその日の作業によっては、夜八時、九時までの残業になる場合もある。また作業内容によって一日三交代の勤務になることもある。その他日曜日や作業終了後には雑役が多い。これは凍結した野外便所の清掃や炊事の応援（じゃがいもの皮剥きや食料品の積み降ろし）、さらには収容所長はじめソ連側職員官舎清掃等であった。

朝食は高粱や大麦のお粥であるが、その際、昼食弁当として黒パン三百五十グラムも一緒に配給された。ただし空腹のため一緒に食べてしまうので実質は一日二食になる。昼食時には作業場で僅かばかりのスープ（パンの副食としてキャベツやトマトの切れ端が少し混じったもの）が飯盒のふたに支給された。

私達は飢えと酷寒に耐えながらおよそ土方と言われる仕事は何でもしたが、作業内容の一、二を述べれ

ば、入ソ後のまずはじめは岩山での採石作業であった。建築材料としてセメント・砂・小石は欠くことはできないが、海岸からほど遠い砂漠地帯では、岩山を砕いて小石にする。それには岩山を崩さねばならない。この際最も重労働であり長時間を要するのは発破をかける小穴を掘ることであった。即ち二人一組で、一人は太くて頑丈な長さ一メートル余の鑿のみをあてがい、他の一人は柄の長い大きなハンマーを振り上げて、鑿の頭部をバーン、バーンと叩きつけながら直径約五センチの穴をあけていく。ハンマー振りは腹が減って疲れるが身体は温まる、あてがうのは寒いし、またうまく操作しないと穴が曲がって数十センチより進むことができなくなるので習熟した技術が必要である。二人で相談して百回交替とか二百回とかを定めて掘り進む。深さが一メートル以上に掘れたらソ連監督が合格を点検し、合格なら他の場所へ移動するが不合格なら引き続き作業を続行する。もちろんノルマがあつて、岩山の堅さによって一級岩なら一日に幾つ、二級岩なら幾つと監督が判断した。

次は建物の基礎工事である。寒暖の差が著しいので、建築物の基礎は特に地下深く掘ってコンクリートで固めておく必要がある。しかし砂地であるので、夏は水が出たり崩れたりして深く掘れない。だから厳冬になって砂土が岩盤のように凍結しているときに、基礎部分の幅五十センチ×深さ二メートルくらいの細長い溝を掘るのである。この作業は小さな鑿とハンマーで打ち砕いて掘り上げる。これも一日に何立米とノルマが決まっていた。

これらの作業は、防寒具を着た零下数十度の極寒の中、しかも空腹、栄養失調の中で行つた。

入ソした年の冬は最も疲労困憊に達し、身体の弱い者や下痢等起こした栄養失調の戦友達が次々に斃れて逝つた。翌年の夏頃からは、食事情は改善され、労働や環境にも少し慣れてきた。また、炊事担当責任者のソ連将校が、我々の食料を民間に横流ししていたのがバレて軍法会議に回されたという噂も聞いた。

病気等で休業できるのは医師の診断書がある場合に限られる。ところがソ連の医学は著しく遅れており、

専ら体温計が頼りで、いくら身体の不調を訴えても三十八度以下の熱なら休業許可にならなかつた。四十歳近い召集兵で神経痛リウマチのため足を引きずって歩いてしたが、診療所へ行っても仮病だと不許可になり、全く気の毒な人達も多くいた。私は煙草をのまぬからよいものの、喫煙者は本当に哀れだつた。新聞紙を十センチ×五センチくらいに小さく切り取って、その上に枯草を刻んでのせて葉巻タバコにする。マッチの代用には、まず上衣等から綿を少し抜き取って、これに糸をグルグルとしっかり巻きつける。次いで尖つた小石二つで火打石を作る。風の強い野外ではすぐ火が付く。こんなものでものまないと煙草中毒で仕事に手が付かないのであつた。

四、共産主義教育と民主化運動について

入ソ数カ月後に「日本新聞」が配布された。ハバロフスクで発行される「日本新聞」は、戦前に亡命した共産主義者達が、赤旗の姉妹編として編集しているとのことだったが、日本語の活字を久しぶりに見て、我々は飛びついてむさぼり読んだ。しかし中身は「天

皇制、軍国主義の批判と弾劾、そして社会主義と偉大なるソ同盟のためにハラシヨラポータ（一生懸命働け）になれ」という趣旨のものであつた。私達は「騙されてはならぬぞ」と互いに肩に唾をつけて話し合つた。なお、「日本新聞」の中で私が記憶する最初の記事は、二十年九月二十七日、天皇陛下がマッカーサー連合国軍総司令官を訪問されたときの写真だつた。即ちパイプを口にくわえそり返つて両足を組んだ傲慢な司令官と、彼が見下ろす礼儀正しいモーニング姿の背が低い天皇だつた。そしてその下に次のコント漫画洒落があつた。「マッカーサーとかけて何と解く？ オヘソと解く。そのところは？ チン（朕）の上にあり」

「日本新聞」の論調は我々軍国主義教育を受けた者には、全く寝耳に水のことばかりで荒唐治療的教化であつたが、漸次これに同調する部分が出てくるようになった。何故なら人間とは弱いもの。言語に絶する強制労働、栄養失調等でバタバタ斃れる戦友、中には射殺される者も出てきた。我が小隊の丁君は作業中集団か

ら十メートル離れた草むらで大便中、警戒兵にお尻を狙い撃ちされた。またE君は仕事ぶりが悪いといって実弾を充填した銃口を鼻先にあてて脅迫され、本人はもとよりみんなが真つ青になった。こんな中で思想教育は最も効果があるのである。即ち私達が宗教心を興すのは肉親の死・自己の不運不幸・病気になって死を熟考するときという。「人生のどん底」に立って、初めて世の無常を知り宗教の門を叩くのである。後述するが、マルクス・レーニン主義という宗教に溺れた、いわゆるアクチブなる人達もまたこの哀れむべき犠牲者なのである。

二十一年に入ると、捕虜の中から若くて社会主義的素養のある者（将校や下士官ではなく兵の階級にあるインテリゲンチアや労働者農民）が四人五人と選ばれて、三カ月間労働を免除され特殊学校へ派遣されるようになった。

何とかしてソ連側の目をごまかして思想的には「酔ったふり」、労働は要領よくパンを獲得することを基本としてきたが、一年を経過する頃にもなると、これ

は大変に難しくなってきた。即ち三カ月間の特殊教育を終了したアクチブ達が帰ってきて、民主委員会が設立され、事務局には労働を免除された教化専門のこれから活動家が常駐して、壁新聞を発行し集会や演説会等を行った。その権力は、もはや部隊長を初めとする将校団をしのぐようになってきた。ソ連人をごまかすことができても、彼らをだますことはできなかった。

アクチブの当面の目標は、特権階級としての旧軍隊組織を解体して民主的組織に改編すること。その手段としてまず反動将校の摘発と糾弾であった。

昭和二十二年夏、体格の虚弱な人々を帰還させると言って、二十人余の人達が発売していったが、半信半疑であった。しかしその後、入ソ直後故郷に出した手紙の返信がスイス国際赤十字を通じて来信したことや、帰還者からの無事帰国等の便りが来るようになるなど、いよいよ生還は現実のものとして受け止められるようになった。二十三年になると思想教育が浸透して「働く者の味方、ソ同盟が強くなることは我々自身が強くなることだ。労働者には国境はない、我等の祖国

ソ同盟万歳！ 偉大なる指導者スターリン万歳！」と
なつてくると、もう死に物狂いで仕事をした。元来日
本人は器用でせつち屋であるので、仕事をやりだし
たら中途半端にできない性分である。ソ連監督も日本
人捕虜を信用して作業を任せ切りにする。「ダモイは
民主化した者から、ハラシヨラポートから」と言うソ
連側の宣伝を待つまでもなく、思想的にも労働的にも
大転換が行われた。この頃から食料事情も好転し、成
績の良い者には少々の小遣いまで支給されるようにな
った。

五、思想教育の怖さと人間の弱さ

捕虜という極限状態の中でも「我々は日本人同士な
のだ、雑草となつても手をつないで祖国にたどり着
き、日本再建の捨て石になろう」と思っていたはずな
のに、いつしかマインドコントロールされてマルク
ス・レーニン主義へと傾倒していった。

入ソ当初、私達の本心は、なるべく仕事をしないで
(敵国を富ますようなことはできない) 要領よく働き
ノルマの評価点を高めてパンにありつくことであつ

た。そのためには「将校は仕事をしないのだから、ソ
連現場監督や警備兵とうまく渡りをつけよ」である。

しかしここに一つの火種がある。ソ連側と兵隊達との
ギャップ、働く者とこれを指揮する者との立場の相違
である。ソ連当局は大隊長・中隊長・小隊長の将校に
対し、収容所内外で「もっと働かせ、もっともっと」
と手を替え品を替えて圧力を強めてくる。こんな場合
最も大事なことは、信頼関係に基づく指導力である
が、天皇の命令という大権をなくした今、学徒出身や
士官学校出の職業軍人では到底無理がある。これに思
想教育が絡んでやがて「人民裁判」となり「邪魔者は
炭坑へ・他部隊へ追放」となつていくのであつた。

寒い冬が終わり春が来ると必ず「ダモイ＝帰国」の
話が出てきた。一方では近くのカラガンダ炭坑行きや
他部隊との人的交流が行われた。まず当収容所から二
十人くらいが炭坑行きになった。今まで生死苦楽をと
もにした戦友達と別れて、知らぬ収容所へ行くことは
身を切られるよりも辛いことで、しかも炭坑ではガス
爆発や落盤事故等が多発していた。我が中隊からは親

友のMとY以下数人が指名された。残念無念、齒を食いしばって去って行く両君と別れたときは言う言葉がなかった。この選定は日本側將校によって行われるのであるが、その選出方法が問題なのである。M、Y両君ともみんなから信頼され、日本人を愛しソ連の不法行為等を見過ごすことができない正義感の強い男である。そのことは逆に小隊長にとっては目の上のこぶとなるのである。その後Y氏は落盤事故で生き埋めになり、救出されたが足が不自由になった。しかし、二人とも今なおかくしゃく、健在である。

二十三年の春、反動將校の摘発と糾弾が始まった。休日に全員が広場に集まって十人くらいの反動將校を面前に引き出す。そして戦時中のことや最近の作業指揮等についてアクチブが代表質問をする。回答がおかしいと「嘘をつけ」とか「違う」とかの野次が飛び、時には会場が怒号と野次で騒然となる。これがいわゆる「人民裁判」と呼ばれるもので、進行係はアクチブが務め、ソ連側立ち会いのもとに行われる。ともあれ私はかかる行為には絶対反対であり、苦々しく、反動

將校に同情の目でこれを見ていたが、終了後知人のアクチブに「日本人同士でかようなことを二度とするな」と嚴重忠告した。

人間とは一面なんと物事に順応するものか。また窮すれば通ずると言うが、なんと器用な人達のいることであろうか。三年目に入ると、いつの間にもやら劇団や楽団ができていた。そして休日には食堂にソ連当局者の家族まで招待して公開公演を行い、ソ連婦女子から拍手喝采アンコールである。女装のかつらやバイオリン等を知らぬ間に廃品で作製してくる。旧盆には盆踊り、春秋には相撲大会であった。

帰国のためナホトカ湾に到着したが、先着部隊の中にはここへ来て二カ月も経つが未だ帰してもらえない、収容所ではあまり民主化教育を受けなかったので毎日しぼられている、昨日なんかここまで来てまた逆戻りして奥地へ行った部隊もある等の話を聞き、大変だと思った。二日後に筋金入りの現地アクチブ数人が乗り込んで来た。まず赤旗の歌「民衆の旗、赤旗は戦士の屍を包む……」に続いて私達と論議してテストす

る。更に反動將校や憲兵等の摘発をするのであった。

召集解除で東舞鶴駅に行くと、日本共産党の人達が「同志ご苦労さん、是非入党して下さい」と机を並べていたので一瞬迷ったが、「石川県の旗」を持った県援護課職員が来られたのでその後が続いた。入ソ当時あれほど共産主義を忌み嫌い軍国主義が骨の髄にまで染み込んでいた私だったが、舞鶴へ上陸した時は間違いない共産主義者だった。ミイラ取りがミイラになるとはこのことである。上陸日の翌日、日系アメリカ軍取調官から「君は共産主義思想をどのように思いますか」との問いに対し「立派な主義だと思います」と即座に答えた。更に続けて「それでは日本共産党に入党しますか」には「多分入党すると思います。ただしいま直ぐには入らない。何故なら私はこの三年間、唯物論という一方的な教育しか受けていないので、これから唯心論を初めもっと幅広い勉強をしてからにします」。これが私の本心であった。

「敗軍の將は兵を語らず」、高級將校とは無縁の一

兵士だったが、復員以来四十年間は「私は貝になりた」として、戦時中のことには一切沈黙を続けてきた。その理由は、明治以来の父祖達の艱難辛苦と尊い遺産や蓄積を踏みにじってこれらを犠牲にした自責の念から、また後に続く者あるを信じて散って逝った戦友達に対する慚愧の念に耐えかねてのことである。ただし、それだけではない。私自身が体験見聞した「終戦時、満州在留邦人の悲惨さ」や、シベリア抑留中の「人間であることを捨てなければならなかった」こと等は、思い出すだけで発狂しそうになるためでもあった。しかし、日本が経済大国として、特に近隣諸国から羨望の的となった昭和五十年代以降の世論や外交政治教育は、「勝てば官軍、敗ければ賊軍」なる風潮が横行し、侵略・南京大虐殺・従軍慰安婦、更には南方や中国で強姦・略奪の限りを尽くした旧軍人が神とされるはずはないとして靖国神社に反対する等々……ごくごく一部の不屈者が犯した犯罪行為を日本軍全体が行ったとして義務教育の中学や高校教科書にまで掲載されるに至って、遂に黙過することができず恥を忍んで

敢えて重い口を開くことにした。けんかは両成敗である。国際法が厳禁する毒ガスの幾十万倍に匹敵する原子爆弾を、卑劣にも人類史上初めて使用し、かつ無防備の六大都市を無差別爆撃して灰燼に帰した者……終戦一週間前に火事場泥棒的に満州へ侵入し、か弱い善良な婦女子を凌辱略奪して多くの残留孤児を生ぜしめ、ポツダム宣言により武装解除した無抵抗の兵士を拉致して、数年間奴隷として酷使するばかりか、今なお北方四島を略取している者……戦いに負けた悲しさ。

敗戦民族がどんな運命をたどるかは今東西の歴史が証明している。私達は、無条件降伏したあの日のことをすっかり忘れていのではないだろうか。終戦時の満州において、二百万同胞が被った真実を見聞して来た私達が、具体的な事例を挙げて語ることは身を切られる思いである。特に無辜の婦女子に加えられた凌辱暴行については、関係者が生存する現状では到底明らかにすることはできない。

最近発表された現地中国婦人作家の見聞記関連と、

抑留者の誰もが経験した一般的事項についてのみ申し述べたい。

中国女流作家ユン・チアン著『ワイルドスワン』（一九九三年一月初版・土屋京子訳）によると「……日本の婦人と二人の子供の死体がころがっている。日本人の将校が切腹し、その家族がリンチされたのだという……いたるところで、日本人が自殺したり暴行されたりしていた。日本人の家は、例外なく略奪された。……強姦もかなりの数にのぼり、男に見えるように髪を剃る婦人も多かった。……略奪、強姦、殺人がしばらく続いたが……」これは南満州の一小都市の惨状だが、北満や大都會では更に加えてソ連軍による凌辱略奪が続いた。残留孤児についても、きれいごとだけ報道されるが、個々の孤児がどのようにして発生したのか、肉親捜しに来日しても何故名乗り出ることができないのか。一人の孤児の陰に泣く多くの大人達の実態が解明されていない。

私達は満州から千々五百人単位の列車でシベリアへ連行されたが、十人くらいのソ連警備兵も同乗して

いた。暑さ凌ぎや顔を洗ったりする際に上衣を脱ぐと、彼等の両腕には例外なく強奪時計が鉛なりに巻き付けられていた（女性用が特に多い）。入ソ一年後ともなると、捕虜の時計屋さんが土木作業を免除されて、毎日時計修理や分解掃除で忙しく、ノルマはいつも二〇〇パーセントくらいの厚遇だった。

最後に、某誌に発表した私の愚作を披露して亡き戦友の霊前に捧げることにしたい。

「雑草となっても生い茂らん」

想起せよ 死の砂漠シベリア！

零下数十度の猛吹雪を！ 男の血の涙を！

今を去る五十年前、シベリアの凍土に立ってつるはしをふるう日本人捕虜二十五人の一団があった。体温が零下五十度を超えると、ソ連監督は野外作業を中止してバラック内に待避させる。防寒帽に鼻覆い、顔の中で出ている所は目だけである。まつげが凍って雪ダルマのような相手を確認することすら難しい。突然発狂したかのように一人の熱血漢が大声を挙げて泣き叫んだ「我々は敗けたんだ！ 捕虜なんだ、奴隷な

んだ！ 我々は牛馬と変わらないんだ」と。これに続いたY軍曹は「そうなんだ！ みんなよく聞けよ。俺達はみんな奴隷なんだ、一瞬なりともこのことを忘れないように、日に十万遍でもそう叫び合った方がよいのだ。もし自分達が奴隷だと言う意識をなくしたら俺達はもうおしまいだ。俺達は常にこの意識に日覚めていなくちゃならんのだ」と叫んだ。私達は極寒零下数十度の荒野で、飢えと寒さに震えながら強制労働に耐えた。そして雑草となっても祖国へ帰って生い茂り、日本再建の捨て石になろうと誓い合った。この時の熱血漢G君は、昭和二十二年十月二十二日午後四時二十五分、作業中の事故によって二十五年の短い生涯を閉じた。彼は立正大学から学徒出陣で入隊した日蓮宗の僧侶だったが、私とは同年輩で満州・中国とずっと一緒に、終戦後はいろいろと天下国家を論じ日本民族の将来や世界情勢等について腹を割ってよく論議を闘わせた、本当に生死苦楽をともにする戦友であった。深く日蓮に帰依し、いつも上人の御言葉「我れ日本の柱とならん、我れ日本の捨て石とならん」と捕虜生活の

苦難に耐え、「俺は雑草となっても必ず日本にたどり着くのだ」と断言していたのに実に悲しいことであった。

あれから半世紀以上も生き長らえて来た私は、雑草になり切れない我が身を恥じつつも、彼の面影が還相回向となって、今もなお私に密着して離れないのである。

【執筆者の紹介】

山本利男さんは大正十（一九二一）年、石川県能美郡苗代村（現在小松市東山町）に生まれて、今もここに永住されている。

日本海と白山連峰の中間で、白米のうまい加賀平野の中心部に当たり、「一向一揆」の歴史でも知られるように、眞宗（特に大谷派）の信心の篤いところ。土地土地のお寺の立派さに驚かされる。

山本さんが郷土愛とともに信仰の深いのも不思議でないが、調べものが熱心で筆まめな氏は、折々にまとめて、郷土史「祖先の歩み」や「私の家系図」、自叙

伝「素晴らしき七十年」その他を出版発表され、また長年眞宗大谷派小松教区の要職に就いておられるのは、積極的な人生の歩み方として特筆してよい。

職歴は「電気通信」の一本道を通され、名古屋通信講習所を卒業して小松郵便局等で通信士を五年間。現役入隊は青森の電信四連隊。基礎教育が済むと満州牡丹江の電信六連隊へ配属、それから終戦まで四年間は、満州、中支那を転々して奉天で陸軍軍曹で終わり、引き続きソ連に送られてカザフスタン共和国の地獄の炭坑カラガンダの郊外チメルタウで苦勞されたのは本文にある通り。

二十三年九月復員して原職に復帰。その後は電気通信省、電電公社を経て五十五年に定年退職されたが、その間、中央大学法学部を卒業したというから、学問への情熱も人並みではない。

最後に氏の紹介に欠かせぬ一事は、現在までの二十五年間、国際交流に関心を持たれ、ホームステイ・バンクに登録されて、ご家族ともども自宅を開放され、外国人の生活体験生を受け入れられていることであ

る。

二十一カ国から五十一回、延べ六十九人の異国の老若男女を明るく迎え入れられたこと。このもてなし心の愛情は、一時の物好きで続けられるものではない。

イスラム教徒の人々の特異な食事や水の使い方を例にとっても、特別の心遣いと包容力が無ければホームなど続けられるものではない。日本の物静かな農村に、こんなに物識りで、もてなし心の行き届いたホームのパパ、ママがいることに、世話になった異国の客人は深い感銘を覚えたに相違ないであろう。

(石川県 永井 正三)

シベリア抑留回想記

福井県 長谷川 久

私は、兵隊入隊前、満州国、現在の中国東北地区、南満州鉄道株式会社に昭和十七年に入社して、奉天市、現在の瀋陽市の機関区に勤めていた。

昭和十九年に徴兵検査を受けて、甲種合格だった。

昭和二十年五月十七日、牡丹江省八面通の歩兵八十八部隊に現役として入隊。同年七月初め頃、平陽の一二六師団の輜重隊に転属になり、自動車隊として訓練を受け、ソ満国境の陣地構築に参加していたときに日ソ開戦となり、自動車隊として戦闘に参加した。

私の部隊は、ソ満国境の町、綏芬河から牡丹江方面に侵入してくるソ連軍を迎え撃った。戦果は悪く、私たち自動車隊が肉迫攻撃に出動したが、午後四時頃撤退命令が出て、牡丹江市まで撤退した。牡丹江で八面通時代の戦友に会った。前線はいかがと尋ねたら、八面通は敵の手に落ち、何人かの戦死者が出たとのことだった。

今度はハルビンに向けて退くようにと連絡があり、私たちの隊は横道河子まで退き、ここで一戦を交えるとのことだった。一日過ぎて午後二時頃命令が来た。いかに条件が良くとも敵機に対して攻撃してはならないとの命令。すると、間もなくソ連兵が入ってきたが、何もせずに帰った。